



TITLE:

静脩 Vol. 7 No. 6 (1971.3) [全文]

AUTHOR(S):

---

CITATION:

静脩 Vol. 7 No. 6 (1971.3) [全文]. 静脩 1971, 7(6)

ISSUE DATE:

1971-03

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/65941>

RIGHT:



## 本年度中に全学蔵書が収容力を突破

### — “書庫収容状況” 特集号 —

最近行なわれた文部省情報図書館課の「昭和45年度大学図書館実態調査」（昭和45年3月末現在）によると、全学蔵書数が2,916,941冊にたっし、たいする書庫の収容可能数\*は2,934,924冊であり、この結果その余裕冊数は17,983冊となり、本年度中に書庫から図書があふれ出す事態となった。

この由々しい内容をもう少しこまかく部局単位にみてみよう。（以下次頁の『京都大学の書庫収容状況一覧』を参照）部局のそれぞれの余裕冊数を、かりに昭和44年度の年間増加冊数\*\*で除してみると、列举した25部局のうち、10年以上の余裕をもっているのはわずか6部局だけであり、現在すでにマイナスになっている10部局に加えて大半の部局では、10年以内に図書が書庫に収納できぬという事態が起ることになる。

書庫の狭あいは、これまで多くの図書館員をもっとも苦しめてきたものの1つであるが、これは少数者による図書占有、不明図書発生の原因などともなり、結局利用者への大きなしわ寄せとなっている。

したがってこれらの部局では、緊急にその打開策がたてられることが必要であるが、附属図書館の推計によると、全学蔵書数は現在の300万が、18年後の昭和64年には550万を突破するという数字がでていので（「静修」1969年1月号参照）、書庫対策は各部局がバラバラにやるのではなく、全学的かつ長期的展望にたって行なわれることがのぞまれる。



\* 同じ「実態調査」による全学書庫の延面積は13,570㎡であるが、この面積を文部省の“閉架書庫の必要面積—180冊当り1㎡”（国立学校建物の実態調査等に用いる必要面積一覧表）という基準で計算してみると、2,442,600冊の収容数となり、492,324冊も超過収容していることになる。すなわちこの収容可能数の数字自体が、面積的にいうと、ずいぶん無理をしている苦しい図書収納の実状を示しているわけである。

\*\* この年間増加冊数は今後平均3.4%の増加率でのびてゆくと推定されている。昭和25年度—25,101冊。昭和45年度—101,556冊。

## 京都大学の書庫収容状況一覧

—昭和45年3月末現在— (単位 冊)

部 局 名	蔵書数①	収容可能数②	余裕数 (余裕率%) ③	44年度増加数④	余裕＝ $\frac{③}{④}$ 年数	
図 書 館	436,819	463,394	26,575 ( 5.7)	6,919	3.8	(経理・施設 部をふくむ)
文 学 部	511,800	547,197	35,397 ( 6.5)	7,467	4.7	
教 育 学 部	44,331	35,100	9,231 (－26.3)	3,035	なし	
法 学 部	349,413	350,000	587 ( 0.2)	10,259	0.1	
経 済 学 部	255,630	255,000	630 (－0.2)	5,690	なし	
理 学 部	159,149	248,611	89,462 ( 36.0)	5,464	16.4	
医 学 部	120,296	174,000	53,704 ( 30.9)	2,632	20.4	
薬 学 部	13,593	24,200	10,607 ( 43.8)	675	15.7	
工 学 部	204,311	201,760	2,551 (－1.3)	10,625	なし	
農 学 部	218,343	105,550	112,793 (－106.9)	7,764	なし	(農場・演習 林をふくむ)
教 養 部	212,691	158,275	54,416 (－34.4)	11,895	なし	
化 学 研 究 所	19,557	40,436	20,879 ( 51.6)	1,195	17.5	書庫なし 研究室に分置 書庫なし 研究室に分置
人文科学研究所	273,328	112,000	161,328 (－144.0)	13,186	なし	
結 核 研 究 所	2,390	3,000	610 ( 20.3)	256	2.4	
工 学 研 究 所	6,061	8,500	2,439 ( 28.7)	507	4.8	
木 材 研 究 所	5,317	3,500	1,817 (－51.9)	480	なし	
食糧科学研究所	5,407	0	5,407	1,236	なし	
防 災 研 究 所	8,513	0	8,513	969	なし	
ウ イ ル ス 研 究 所	1,584	10,800	9,216 ( 85.3)	570	16.2	
経 済 研 究 所	17,185	123,389	106,204 ( 86.1)	1,921	55.3	
基礎物理学研究所	14,437	24,362	9,925 ( 40.7)	1,132	8.8	書庫の スペースは 余裕あり
数理解析研究所	20,457	20,200	257 (－1.3)	3,871	なし	
原子炉実験所	12,191	16,500	4,309 ( 26.1)	1,865	2.3	
霊長類研究所	488	1,800	1,312 ( 72.9)	339	3.9	
東南アジア研究 センター	3,516	6,650	3,134 ( 47.1)	1,522	2.1	
大型計算機センター	134	700	566 ( 80.9)	82	6.9	
計	2,916,941	2,934,924	17,983 ( 0.6)	101,556	0.2	

〔注〕1. ①・④は「昭和44年度京都大学増加図書統計」による。

2. ② は「昭和45年度大学図書館実態調査票」による。書架棚板の長さ90cmに図書25冊を収容可能として計算。

## 図書室はうつたえる〔現状報告〕

### ○研究室が書庫化——人文科学研究所図書室

270,000冊の蔵書は現在人文研本館、同分館、東洋学文献センター、附属図書館旧書庫、教官研究室、共同研究室の6カ所に分散所蔵されている。一昨年、プレハブではあるが書庫を増築し、スタック・ランナー（手動式集密書架）を入れたが、所詮焼石に水であり、毎年、夏休みにはアルバイト君とともに増加した図書のやりくりで汗水を流している。所内教官からの返却はできる限り控えていただき、また、退官教官の借用図書は可能な限り、新任者にひきつぐといった変則な状態がつづいている。教官の私的ライブラリー化へ、私達図書館員が意に反して加担せねばならないという、なさけない現状下におかれている。

### ○書庫＝収蔵庫か——教育学部図書室

すではみ出している図書は蔵書数の26.3%、さらに年間平均3,500冊で増加する図書をどこに置かかは図書室の最大の問題である。学部としては非常の手段として附属図書館旧書庫の一部を借用したが、これとても一時の急場をしのご程度で、先の予定は立てられないでいる。図書の利用があってはじめて図書の生命があるとすれば、このような分散、はては床に横積みする時、利用は著しく限定され単なる収蔵にすぎず、図書としての価値はなくなってしまう。

### ○ハシゴで図書の出納——教養部図書室

書庫の中は照明があっても暗く、昼でも懐中電灯を片手にしなければ図書の検索ができず、書架も9段・10段の高さになっているので、上段の図書はハシゴを利用しなければ取り出すことができず、能率的な作業はできない。書庫の面積がせまいから、書架間の間隔もせまく、図書を窓際に横積みしたり、書架のてっぺんに並べたり、書架の排列された図書の上にも何冊も積み重ねたり、あらゆる空間を利用して置き、全く足のふみ場もないくらいである。

このような現状だから、利用者から図書を請求されたとき、見当らない場合も多く、少なからず不快な気持を抱かせていることと思う。

### ○書架の間は横あるき——文学部図書室

文学部では1年間に約1万冊ずつ図書が増加し、現在蔵書は約52万冊に達している。全書架の棚の長さをただ機械的に合計して出している毎年の書庫収容能力の調査では、あと何年も書庫がパンクしないような印象があたえられるが、実状はそうではない。書庫設立時よりの固定式書架だけでは図書を収納できなくなると、通路に自立式スチール書架を置きだす。それが今では人の通れるだけを残して林立している。そのために、図書をかかえて歩く職員は、まっすぐに歩くことができず、時にはしゃがむことも、ひっかえすこともできなくなってしまう。

いつの日か、新しく書庫を作る時には、10年はおろか、50年、100年先の蔵書を考えて設計してほしいものと毎日痛切に感じている。

### ○廊下まで書庫に——工学部建築学教室図書室

蔵書数4万冊余にたいし、収容能力は3万冊余、この差約1万冊。このうち8千冊を各教官室に、1千冊を附属図書館旧書庫に分置している。しかしそれでもなお、廊下にも書架をたてならべた当図書室の、その書架の棚には、分類排架であるのに、もうそれぞれの分類の境のところには空間がない。わずかでもすき間があれば図書を横積みにしてしまっている。このような現状だから、雑誌をのぞいて新着図書のほとんどは、各教官室行きである。

### ○またれる新書庫移転——農学部図書室

農学部の蔵書約22万冊は、本学部旧書庫に10万冊、同新書庫に5万冊を収納し、あとは必要に応じて、各学科図書室・研究室に配置している。最近の年間増加冊数は約8,000冊であり、これらはすでに飽和状態となっているが、47年度に予定されている新書庫（収容能力20万冊。40万冊収容まで増築可能）への全面的移転によって解消できるものと思う。

## 図 書 館 商 議 会 専 門 委 員 会

と き：昭和46年1月27日

## 〔第12回〕 議題：学内における図書館長の地位

前回にひきつづき、今回も図書館長の問題をテーマとして取りあげたが、今回はとくに法学部杉村敏正教授に出席していただき、行政法の専門家としての立場からの御意見をうかがった。とくに、これまで委員会で討論されてきた諸問題、すなわち、1. 商議会の性格。審議決定機関か、諮問機関か。2. 諮問機関であるとするれば、館長の諮問機関か、総長の諮問機関か。3. 商議会の権限の問題。商議会の決定と、各部局の図書行政との関係。4. 館長と評議会との関係。館長は自動的に評議員になるべきか、等の問題について、杉村教授から、明解な解釈が示された。

これらの解釈の上に立って、いずれの立場をとるかは、行政的に判断すべきことで、今後の検討が必要である。

## 図 書 館 商 議 会

と き：昭和46年2月27日

## 議題：次期館長候補者の選考について

穴戸館長が昭和46年3月31日付で停年退官のため、次期館長候補者を選考する商議会が図書館会議室で開催された。その結果、次期館長候補者として、人文科学研究所平岡武夫教授（中国思想専攻）がえられ、総長あて推せんされることになった。附置研究所から図書館長が出るのははじめてである。また、東洋学者として館長にえられたのは第4代羽田享教授について、2人目である。

## — ニュース

## 法経両学部旧館の立て替えはじまる

赤レンガの旧館を取りこわして、2階建の図書閲覧室や8層の書庫をもった新営建物の工事がはじまった。竣工は昭和47年3月頃であるが、その間の両学部図書室関係の変更は次とおりである。

法学部では、閲覧事務室（電 2809）は新館1階西端の教官室に、整理事務室（電 2807, 2808）は附属図書館別館1階南室に、文献複写室（電 2821）は同別館1階北室に移転する。なおこの間の私法研究室、公法研究室の図書の貸出しはできなくなった。

経済学部では、従来窓口が2つあった旧洋書の出納事務をすべて経済学部閲覧室（電 2909）で取りあつかうことになった。

## 資料紹介

## ロシア語学術雑誌（化学系）英訳版を本館に備え付け

正確には、「ソビエトで発行されている学術雑誌の英、仏、独語逐号翻訳誌 Cover to cover translations（大部分が英訳誌）」の本館備え付けの希望は、かねてより部局から出されていたが、主として予算面の問題で実現には至らなかった。しかし、穴戸館長の発案により、まず対象を化学系部門に限定して、昨年初頭、学内の化学系教室によびかけ、「京都大学化学系図書懇談会」を図書館で開催し、共同出資による購入方法が検討された。（この詳細については「静修」1970年3月号を参照）

その結果、理・医・薬・工・農各学部、教養部の化学系85教室の賛同を得、購入希望の多い順に英訳版を厳選した結果、下記リストの英訳版を本館に備えることが了解された。現在逐次到着中であるが、加入教室へは各号納入の都度、目次速報が配布されている。

なお、この懇談会に加入されていない部局の閲覧希望者に対しても、加入教室の利用を妨げない範囲での利用は差支えない。（備付場所：本館1階雑誌室）

〔凡例〕 ①排列は英訳誌名、（原誌名）、刊行ひん度、所蔵巻号の順である。

②所蔵巻号の「+」印は以後継続を示し、〔 〕印は未到着だが購入予定を示す。

- 1) Applied Biochemistry and Microbiology (Прикладная Биохимия и Микробиология) m. Vol. 3 (1968)-Vol. 4, No. 2 (1969)+
- 2) Biochemistry (Биохимия) m. Vol. 35, No. 1-2 (1970)+
- 3) Bulletin of the Academy of Sciences of the USSR: Division of Chemical Sciences (Известия Академии Наук СССР, Серия Химическая) m. 1970, No. 1-3+
- 4) Chemistry of Natural Compounds (Химия Природных Соединений) m. [1970]+
- 5) Doklady Chemistry (Доклады Академии Наук СССР) m. Vol. 190-191 [1970]+
- 6) Doklady Physical Chemistry (Доклады Академии Наук СССР) m. Vol. 160 (1965)-183 (1968)+
- 7) Journal of Analytical Chemistry of the USSR (Журнал Аналитической Химии) m. Vol. 25, No. 2-4 (1970)+
- 8) Journal of General Chemistry of the USSR (Журнал Общей Химии) m. Vol. 38 (1968)-39 (1969)+
- 9) Journal of Organic Chemistry of the USSR (Журнал Органической Химии) m. Vol. 6, No. 2-4 (1970)+
- 10) Kinetics and Catalysis (Кинетика и Катализ) m. Vol. 11, No. 1-2, pt. 1 (1970)+
- 11) Microbiology (Микробиология) m. Vol. 39, No. 1-2 (1970)+
- 12) Pharmaceutical Chemistry (Химико-Фармацевтический Журнал) m. 1970, No. 1-4+
- 13) Polymer Science USSR (Высокомолекулярные Соединения) m. Vol. 11, No. 5-12 (1969)-Vol. 12, No. 1-2 (1970)+
- 14) Russian Chemical Reviews (Успехи Химии) m. Vol. 39, No. 1-4 (1970)+
- 15) Russian Journal of Inorganic Chemistry (Журнал Неорганической Химии) m. [1970]+
- 16) Russian Journal of Physical Chemistry (Журнал Физической Химии) m. [1970]+
- 17) Theoretical Foundations of Chemical Engineering (Теоретические Основы Химической Технологии) m. Vol. 4, No. 2 (1970)+

# 京大蔵和書たずねある記

(上)

文学部非常勤講師

熱田 公

もう10年ちかく、京大蔵の和書をたずねて、附属図書館をはじめ各部局の図書室にあるいている。なかでも附属図書館で一番お世話になっているが、その代償に何か「静修」に書けということで、駄文を寄稿せねばならぬ破目とはあいになった次第である。ところでむろん、私自身は書誌学が専門ではなく、また専門の領域から和書を調査しているわけでもない。昭和38年いらい、岩波書店が「国書総目録」全8巻を刊行しつつあるが、その収載書目のうち京大所蔵分について、いつのまにか専任調査員みたいになってしまったわけである。

「国書総目録」は、全国公私の図書館・文庫の国書（慶応3年以前成立のものすべて）の総合目録ともいうべきもの。書名のよみ・冊数・成立年・著者・所蔵者・内容分類等をかかげたもの。すでに7巻を刊行し、残すは1巻のみとなっている。内容分類が簡単すぎるくらいはあるが、国書がどこの図書館に架蔵されているかたちどころにわかるという、何はともあれ便利な本で、利用されている方も多いはずである。京大本についていえば、戦前・戦後の2度にわたって転写したカードを基礎として収録している。大多数は、そのカードで十分用をたしているが、しかしなかに、基礎となった附属図書館のカードの不備によって、若干の不審なものがでる。それについて編集室から照会があれば、その本を検索して原本にあたり、問題点を解決する。これが私の仕事である。1巻2巻の頃は、照会も少なく、編集者からの依頼で気やすく引うけたのであったが、巻を追うにしたがって編

集室の注文もくわしくなり、数百件の照合がくるようになった。したがってその所在も各部局図書室にわたる。私のたずねる本は、どこでも利用度の高い本ではなく、簡単にみつけだせない場合が多い。各図書室でずい分お世話をかけている。「国書総目録」編集室（国書研究室）にかわって、この機会におわびを申しあげる。

さて、ではどのようなことを調査するのかといえば、書名・著者名・成立（刊年・序年・跋年など）・内容などをたしかめることが、おもな仕事となる。というのも、ちゃんとした刊本は別として、写本や著者自筆の原本の場合、必ずしも題名が一定していない場合が多い。図書カードの記載は、たとえば慶安3年刊を慶応3年刊としている、といった単純なミスは別として、何らかの根拠をもっていても、たとえば書名なら、外題・内題・序題のどれであるかをたしかめなければならない。著者も、序文や跋文の筆者を著者と誤っている場合があって、序文に目を通さぬばならなかったりする。写本では、筆写した人を著者と誤っている場合もままある。こうした微妙な問題については、図書館のカードはしばしば不十分であり、それが編集部で発見されると、私の方へ照会されてくる、というわけである。

ところで図書館のカードが不十分である、とはいっても、司書の方々を批判する気持はさらさらない。著者・書名・刊年という図書のもっとも初歩の整理にも、和書になじまない場合が多いし、難解な文字や文章を読解せねばならぬ場合が多い。一おう古文書を専攻しているはずの私にも、お手あげの場合も多い。時には、傑作な読みちがえもあって思わずふきだすこともあるが、京大蔵の和書のすべてについて、図書カードが作成されている、歴代関係者の労苦に対し、まことに頭の下る思いがするのである。

あとがき：本号に特集した書庫収容力の問題は、その対策に図書館員がもっとも頭を痛めてきているものであります。第2頁の数字や、第3頁の「図書室はうつたえる」を読んで、苦しい現況を認識していただきたいと思います。そしてこの窮状を打開するのに、利用者のかたがたもご協力くださるようお願いいたします。

京都大学附属図書館報「静脩」Vol. 7, No. 6 (通号39号) 1971年3月15日発行・編集発行人：岩猿敏生 発行所：京都大学附属図書館・京都市左京区吉田本町・電代表771—8111 (内線) 2220~2238